



抵抗と権力から統治の主体へー統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想ー

箱田, 徹

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2009-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4625

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004625>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	箱田 徹
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 4625 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 21 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

抵抗と権力から統治の主体へー統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想ー

審 査 委 員

主 査	教 授	市田 良彦
	教 授	水田 恭平
	教 授	廳 茂
	教 授	宗像 恵
	准教授	上野 成利

論文審査の結果の要旨

氏 名	箱 田 徹		
論文題目	抵抗と権力から統治の主体へ——統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	市 田 良 彦
	副 査	教授	水 田 恭 平
	副 査	教授	廳 茂
	副 査	教授	宗 像 恵
	副 査	准教授	上 野 成 利
要 旨			
学位申請論文『抵抗と権力から統治の主体へ——統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想』は、ミシェル・フーコーの1970年代後半～1980年代の著作を主な対象とし、同時期のフーコーの思想を統治概念の発展過程として考察する思想史研究である。 1960年代以降の、いわゆるフランス現代思想最大の係争点は、一般に「主体か構造か」だと見なされてきた。60年代まで強い影響力をもったサルトルやメルロー・ポンティの現象学とマルクス主義が「主体」の側にあるとすれば、レヴィ・ストロース、アルチュセール、ラカン、フーコー、ドゥルーズなどの思想は「構造」の側にあるとされた。しかしフーコーの思想を理解する上では、この構図がそもそもミス・リーディングではないのか、つまり「主体か構造か」という枠組では、フーコー			

の思想、特に1970年代後半以降の後期の思想を捉えることはできないのではないか、これが研究の出発点にある問題意識である。そして「主体か構造か」を退けたうえ、後期フーコー思想を統合的に把握する概念枠組として、論文は「統治」(gouvernement) 概念を提出する。

論証は第一章において、フーコーにあっては「権力と抵抗」という二元論がそもそも無効であることを主張することからはじまる。フーコーの権力論がしばしば、構造としての権力が全能であるかのように読まれ、主体による抵抗の余地を残していないと批判されるからである。第一章では70年代の「中期」フーコー（権力論が展開された時代）に、確かに「抵抗」の問題系がほぼ存在しないものの、権力論そのものが後の統治論へと変容していく痕跡を見せることが明らかにされ、主体のすべてを決定付けるはずの権力が、主体を構成するという役目から別のところへ移動していく様が辿られる。そして第二章では、この中期フーコーにも「真理を通した主体化」という問題を媒介に、主体化にかんする非キリスト教モデルが探られていた事実を明らかにする。

第三章以降では、これまでのフーコー研究ではあまり用いられてこなかった講義録と、エピソード的にしか語られなかったフーコーのイラン論を通して、「統治」という概念の発展が辿られるとともに、それが人々の「導き」と、それに絡み合うように存在する「対抗導き」という二つの系をもっていることが跡付けられ、それまでの権力論を内部に包含する大きな問題設定としての「統治」の姿が再構成される。ここではそもそも、主体は「自由な」ものとして存在することが前提として要請されている。すなわち「統治」概念のもとでは、主体を「作る」ということがもはや問題になりえないということが論証されるのである。

第五章と終章では、こうした統治論—主体論が、晩年のフーコーに、古典古代から現代にまでいたる哲学史の書き換えや、アクチュアルな問題への再アプローチを試みさせていたことが明らかにされる。

本研究はこのように、後期フーコーを、一般に理解されている権力論のフーコーとはまったく異なる概念枠組みをもつ思想家として体系的に描き出しており、それに成功したはじめての試みであると評価される。よって審査委員会は、委員全員の一致により、学術博士の学位を与えるに値すると判定する。

論文の作成について口頭で説明をうけた

(別紙様式3)

論文内容の要旨

氏 名 箱田 徹

専 攻 人間文化科学

指導教員氏名 市田 良彦 教授

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること)

抵抗と権力から統治の主体へ
—統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想—

論文要旨

要旨

要旨

本論文『抵抗と権力から統治の主体へ—統治概念の生成と発展としての後期フーコー思想』は、20 世紀後半のフランスの哲学者・思想家ミシェル・フーコー(1926-1984)の1970年代後半から1980年代にかけての思索を主な対象とし、同時期のフーコーの思想を統治概念の発展過程として考察する思想史研究である。

近年、本研究が対象とする後期フーコーの思想についての関心は特に権力論の分野で高まりつつある。統治については、フーコーが自由主義以降の統治理性の特徴を述べる際に用いた安全や生政治の概念と共に、ネオリベリズム批判に応用される機会も多い。だがこのような後期の権力論と、同時期に同じ統治の語を軸とし、自己やパレーシアなどの概念を通じて考察された主体論との関係はまだ本格的に論じられていない。他方で1970年代以降のフーコー思想の解釈をめぐっては、権力論と主体論の断絶の有無、権力と抵抗の関係性に関する議論も数多く行われてきた。

本研究はこうした現状を踏まえた上で、後期フーコー思想とは、統治概念の理論的深化により、権力論と主体論が統治論として一元的に把握される過程であることを明らかにする。これが本研究の主張であり、最大のオリジナリティでもある。既存のフーコー解釈との関係でいえば、統治の一元性という観点は、権力論

の行き詰まりや主体論との断絶という議論も、抵抗と権力の二元論も退ける。というのは、統治こそが一見対立する両者を共に基礎付ける枠組であり、そこでは自己が、自らと他者の間の権力関係を自らのあり方へと絶えず織り込んで主体化するからだ。自己は、自らを導き、他者を導き、他者から導かれる統治の主体として自らを構成するプロセスの中にしか存在しない。また戦後フランス社会思想の中でのフーコーの位置づけという観点からすると、後期フーコー思想を統治論として読むことの意義は「構造か主体か」という構造主義以後の大きな論争の中で、フーコーの議論を「自己と他者の統治」という表現を通して「構造も主体も」という立場を成立させる主体論として位置づけようとするものでもある。

以下、各章の構成を述べる。

第一章「誘惑する権力と権力論の展開 権力と抵抗の二元論の無効性」では、1970年代前半から後半までの時期を対象とする。まずフーコーは〈抵抗〉自体を考察の対象とはしてこなかったことを指摘する。かれの関心はやはり権力諸関係とそのメカニズムの分析にあった。刑務所問題や規律訓練権力論では〈反乱〉や〈闘争〉が度々用いられていたのとは対照的に、〈抵抗〉に関する議論は『知への意志』(1976年)で権力が関係として規定される際に初めて登場する。しかしドゥルーズも指摘するように、フーコーの権力論が抵抗に関する問いを惹起させてしまうことは否定できない。この観点から『汚辱に塗れた人々の生』(1978年)を考察すると、二つのことがわかる。一つは権力に書き込まれる「痕跡」としての主体の実践が存在すること、もう一つは『知への意志』での抵抗に関する議論と非常に近い記述を通して、この時期にすでに展開していた統治論に近い観点が存在することだ。つまりこのテキストもまた明確に権力論の延長線上に位置づけられる。したがってこの時期のフーコーには権力と抵抗という二元論的な構図が存在するというよりも、権力論から統治論への展開がうかがえると論じる。

第二章「規律訓練とエロスの技法 キリスト教的権力モデルの構成過程」は、『精神医学の権力』から『異常者たち』、『社会は防衛しなければならない』に1973-1976年度コレージュ・ド・フランス講義を経て『知への意志』に至る1970年代半ばの時期を対象とし、〈規律訓練〉についての考察が〈導き〉の枠組を介して、キリスト教型権力モデルとして把握されていることを示す。個人に作用し、臣従化を行う権力は、1970年代半ばまでに規律訓練権力と名付けられた。1970年代にその典型例としてセクシュアリティが扱われたのは、この概念自体がキリスト教から精神医学へと引き継がれた、真理を自ら語ることを通した主体の生産という形態を取るからだ。このことを明らかにする過程で、フーコーは規律訓練の源には魂の導きの概念があることを示唆する。しかしこの指摘は同時に、真理を通した主体化についての非キリスト教的なモデルへと至る。こうして提示されるのがキリスト教西洋の〈性の科学〉とは異なる〈エロスの技法〉の主体化モデルである。一見すると権力と抵抗に擬せられる二元論的な対立だが、フーコーは、真理の体得による主体化というエロスの技法の図式に先行性があるとまで論じていることは興味深い。ここからうかがえるのは、フーコーが権力関係の作用の中での抵抗の役割を問題にしているだけでなく、権力関係自体を成立さ

せている導き＝統治へと関心を向けていることだ。

第三章「司牧権力の系譜と新自由主義論 他者の統治論の到達点」では、1977-1979 年度講義『安全・領土・人口』と『生政治の誕生』を対象として、フーコーが〈司牧権力〉概念を導入した後に行った、西洋近代の統治理性についての考察を踏まえた上で、統治概念の一般的射程を明らかにする。フーコーは規律訓練権力概念の系譜を考察することを通して「全体的かつ個別的」な導きを行うキリスト教司牧概念の西洋史上での特異性に会う。これをフーコーは〈司牧権力〉概念と呼んだ。その特徴は導きの対象を人にする「人の統治」という概念に特徴的である。フーコーはこの統治という概念を用いて、ウェストファリア体制以降の主権国家体制の下での国家の統治理性のあり方を絶対王制下でのポリス論、古典的自由主義、新自由主義の三つに区分した。ポリス論が初期資本主義の統制的な社会秩序の形成に寄与するものであるとすれば、自由主義以降の統治性は社会に介入し、統治の経済的合理性を追求する。18 世紀以来の古典的自由主義の統治性は自由放任による市場プロセスの尊重を唱えたが、第二次大戦後になると、完全競争市場を理想的なモデルとして、その実現のために社会に積極的に介入する新自由主義的な統治性へと移行する。だが後期フーコー思想を理解する上での両年の講義の決定的な意義とは、国家理性論の展開という政治思想史的な議論や新自由主義の起源という経済学史的な考察を超え、〈司牧権力〉概念を通して、導きと統治の構図が描かれる点にあるだろう。それはまた統治を真理と主体の関係性として提示することでもあった。

第四章「革命情勢下のイランと対抗導き 統治論による抵抗論の再構成」は、フーコーが 1978-1979 年にかけて記した、革命情勢下のイランに関するテキストを考察対象とする。そして権力と抵抗という従来の二元論型の図式が、統治の一元性という観点によって、導きと対抗導きという対概念で捉え直されていることを示す。具体的には〈イスラーム的統治〉と〈政治的霊性〉という独特の表現に焦点をあてる。これまでフーコーのイラン論は、宗教、霊性、抵抗などの語彙によって論じられてきた。だが統治の枠組から一連のテキストを読むと、かれの理論上の関心は、集団的な対抗導きの運動と、そこに参加する人々の主体化プロセスをめぐる問いであることがわかる。「対抗導き」とは、主体が導きかつ導かれる存在であるという認識に基づいた上で、自己や他者を支配的な導きとは異なる方向に導くことだとされているからだ。こうした認識は、カントへの言及と合わせて、統治を権力関係の戦略的な場と定義する後年の議論の先取りでもある。

第五章「用いる者と用いられるものは別である 一九八〇年代統治論の展開」では、1981-1982 年度講義『主体の解釈学』の前半部の主題であり、1984 年の本の書名でもある〈自己への配慮〉に関する議論を分析の対象とする。フーコーは統治に関する議論の最初から非キリスト教型の統治モデルを意識していたが、1980 年代になって、古代ギリシア・ローマの哲学諸派が取り上げた〈自己への配慮〉をその一般形態として提示する。そして同時に、この概念を自己の統治という図式を通して統治論の基礎へと組み込む。フーコーが具体的に検討するのはプラトン哲学とヘレニズム哲学、とくにストア派の思想である。ここでは自己の統

治が他者の統治に優先し、真理の体得を通じた自己変容が目指された。ここから明らかになるのは、一般的に古代哲学の基礎概念とされる〈汝自身を知れ〉(自己認識)は、実際には自己の統治としての自己への配慮に必要な二次的な条件に過ぎないことだ。ところでフーコーがヘレニズム期の社会と思想に注目するもう一つの理由は、ローマ社会にキリスト教が浸透していくにつれて、古代哲学の諸概念はもちろんのこと、自己への配慮という枠組自体がキリスト教的な司牧の構図へと織り込まれていく点にある。こうして自己認識は自己の客体化と同義になる。だが統治の枠組そのものが自己と他者の統治である以上、自己への配慮の系譜は途絶えることがない。この点でフーコーは主体の変容を真理の獲得条件とする〈霊性〉の主観的な実践の系譜をキリスト教の内外に認める。またより広くは、自己への配慮を統治の一般モデルとして定式化したのである。

終章「抵抗と権力から統治の主体へ 抵抗の消失と統治する自由な主体の出現」では、主体の自由が権力の前提条件であるという 1980 年代のフーコーの考え方と、啓蒙論への関心とを「関係の変更」という観点から接続する。フーコーは自由を統治者と被治者の間にある関係的なものとして捉えていた。この点は導きと対抗導きの議論につながる。フーコーは「反司牧革命は歴史上存在しなかった」という表現で、導き＝統治とは権力関係と同じく関係論的なもので、廃絶できるようなものではないと論じた。カントとボードレールはそれぞれ啓蒙とダンディズムを、自らの存在の特異性と歴史性を同時に問う実践だと捉えた。現在の自分から距離を取って再帰的に自己と関わること、これが二人にとつての「モダン」で自由な態度であった。この関係の変更と自由の実践は、フーコーが『主体の解釈学』から、亡くなる直前の 1984 年講義で扱うパレーシアの問題と直接関わるものだ。主体にとってパレーシアとは自己との正しい関係を結ぶ倫理的な実践であり、自己への配慮を選択する自由のことであったからだ。そして「自由の実践」とは、現在の自分を再帰的な存在として主体かつ客体として二重に生成する営みであったことを再度確認し、最後にフーコーがいう主体化とは、主体が他者との関係の中で「自らを導き、構成する」自由な過程のことだと結論づけた。